

# 住宅設計コンペを通じた 横浜新町における『まちにわ』の提案

1090445 佐伯 亮

高知工科大学工学部社会システム工学科

多くのニュータウンでは一様な街並みが形成され、他人とのコミュニケーションがとりにくくなっているが、永続的に人が住まい、他人とコミュニケーションをする場のある街にするために、まず第4回ダイワハウス住宅設計コンペに応募し、家と家との関わりやまちづくりについて提案を行なった。次にこのコンペ案をもとに「まちにわ」という提案を行なった。これらの提案から、住宅と住宅の間の空間にコミュニケーションの場をつくり、永続的に住まう事の出来るまちとなる事が可能であると考えられる。

**Key Words: まちにわ、共用**

## 1. はじめに

全国各地に存在するニュータウンは、山を切り崩した後に雑居造成され、各住宅メーカー等の住宅が建ち並んでいる。それらの家は完全に区別された街区と敷地によって、整然とした街並みを形成している。完全にプライベートとパブリックが分離され、かつては住民同士のコミュニケーションの場となっていた路地や庭等も、無くなったりプライベート空間へと変化してきている。こうした街は近隣との関係を希薄にするとともに、街の風景を一様なものにしてしまっている。また、昭和50年前後に形成されたニュータウンの多くは、高齢者の急増、人口の減少によりオールドタウンと呼ばれるようになってきている。人口減少に苦しむ中心市街地やオールドタウンがある一方で、新たに山を切り崩し、ニュータウンが開発され、それはやがてオールドタウンになっていく、という悪循環が起こっている。そこでまず、第4回ダイワハウス住宅設計コンペにおいて、路地や中庭を共用しコミュニケーションをとれる場所、『まちにわ』の提案を行った。次にコンペ案をもとに高知のニュータウンである横浜新町の街並みに変化を与えると同時に、一つの街に長く住むことができ、新たな居住者を呼び込む為の提案を行なった。

## 2. コンペで考案したコンセプト

### 2.1 基本コンセプト

本提案はまちに存在する中庭や路地をより有効活

用し生活機能の一部を隣近所で共用する事を提案する。路地や中庭を共用し、それらをより魅力的にする事によってそこが人の集まる場所、コミュニケーションをとる場所となり、隣近所との繋がりを持つ。共用は繋がりをつくり、生活をより豊かにしていく。

例えば住宅の中庭を共有しそこで本来ひとつの住宅で行われる生活の一部を近隣の住人と共用する。食事、読書、料理、趣味等様々な生活を共用する事によって人と人の繋がりをつくるとともに、人々の生活を豊かにする。(図1)

それらの繋がりには災害や事故、病気等不測の事態が起こった時お互いを助ける。

またその中庭や路地が、街全体に広がる事によって、中庭はまちを歩き回る新たな『まちにわ』となり、路地がそれらを結ぶ。何かを共用するという事は必然的にコミュニケーションを必要とする。そこに新たな人と人との繋がりや関係が生まれてくる。そうした価値を、共用を通じて発見する。

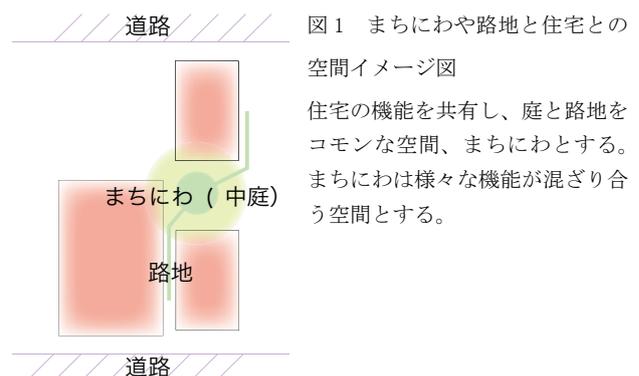


図1 まちにわや路地と住宅との空間イメージ図

住宅の機能を共有し、庭と路地をコモンな空間、まちにわとする。まちにわは様々な機能が混ざり合う空間とする。



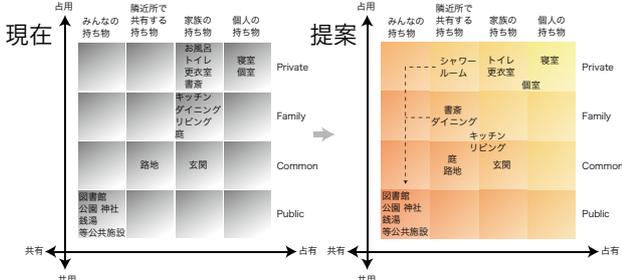
図2 コンペで提案したまちにわネットワークのダイアグラム

始めはパブリックルートを歩き移動をしていたが、増えてきたまちにわをつないだコモンルートを利用して、人が動き始め、新たなコミュニティネットワークが形成される。

2.2 共有と共用、占有と占用

共有とはあるものを一緒に所有する、共用とはあるものを一緒に使うということである。占有とは自分の所有にする、また占有とは独占して使用するというものである。例えば、銭湯は個人、企業の占有であるが皆で使うので共用である。しかし家庭の風呂は家族で共有しつつ、時間を区切って個人が占有している。

一般住宅の中で家族の占有、または占有であるものは多々あるがその一部は隣近所で共用する事も出来る。例えば、ダイニングは家族のもの（共有）で、家族で利用（共用）するのが普通だが隣近所で共用する事も出来る。



現在の住宅はそれぞれの機能が分類され明確に分けられている。都市にも同じ事が言える。それぞれの機能を曖昧に分け、共有する機能を多くする。まちとの関わりも増え住宅は多様な関係を持つ。

図3 現在一般住宅に設けられている主な機能とその分類図

2.3 まちにわのデザイン

コンペでのまちにわのデザインは、まちにわに全ての住宅が関わりを持つように設定した。それぞれの住宅からダイニングや庭に向けた展示スペース等、生活機能の一部を共用する事が出来る。路地にも屋上庭園の植物が見る事が出来る等、歩いていて何かある空間となるようにデザインした。

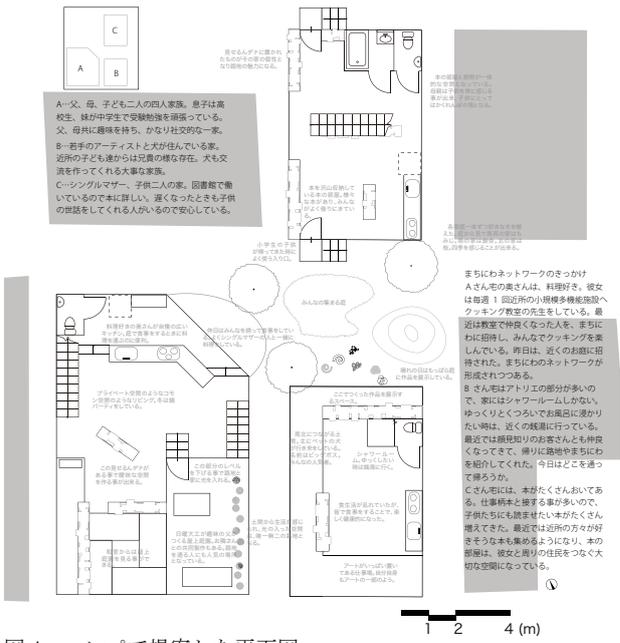


図4 コンペで提案した平面図



図5 まちにわの模型写真  
まちにわでは隣人同士が食事をしたりする。また生活機能の一部をまちにわと繋げまちにわに開いた住宅とする。



図6 路地からまちにわを見た模型写真  
木を植えることで季節を感じるとともに、二階のプライバシーが高い部分を守る。

### 3, 横浜新町内における設計

#### 3.1 現況と課題

横浜新町は高知県高知市の中心部から南に約6kmの太平洋が望める場所に位置している。

開発面積72.4ha、計画戸数1800戸、計画人口6300人という住宅団地である。

高知市では、魅力あるまちづくりの基本理念として「街角にみどりの風、人間と文化・自然」を掲げ、市民の憩いの場、交流の場作りを行っている。横浜新町にもインターロッキングブロックを敷いたり、四季の花木の植栽、ふれあい広場等の整備を行っている。しかしながら実際に横浜新町に行ってみるとそれほど有効利用されている様子は無い。

また横浜新町における人口推移を見てみると少しずつではあるが減少傾向にある。このままではオールタウンとなり、やがて誰も住まなくなってしまう可能性も考えられる。

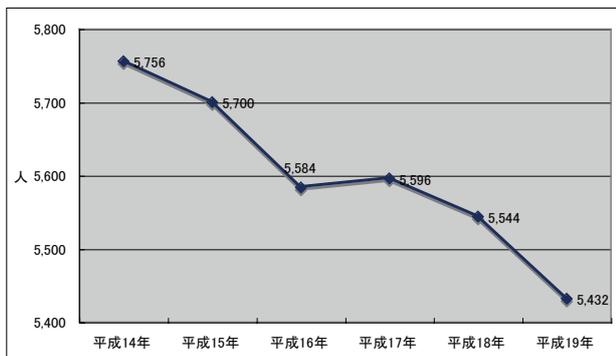


図7 横浜新町の人口推移データ

横浜新町における『まちなわ』の設計対象地は、横浜新町南東に位置する2ブロックの街区である。周りには瀬戸公園や、横浜新町小学校がある。

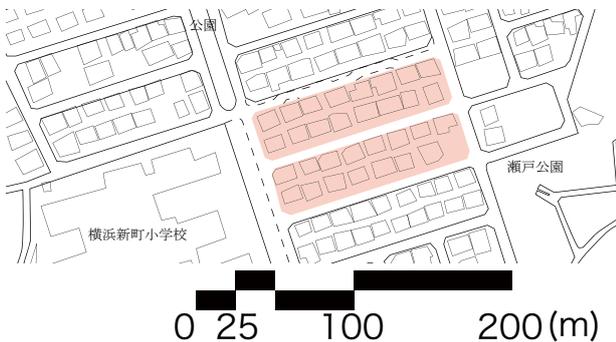


図8 横浜新町内の対象地の位置図

#### 3.2 横浜新町における土地検出方法

現在対象地は多数の家々が建ち並び、共用のまちなわ、路地といったものがつくれる余裕は全くない。まちなわや路地をつくるには、どうにかして土地を検出しなければならない。

検討した結果横浜新町のあまり有効利用されていない公共用地を居住区域として利用し、土地を確保することにする。

空き地となった場所は共用のまちなわや、路地として活用する。その土地は公共用地であるが、整備費用は周辺の家々が負担する。

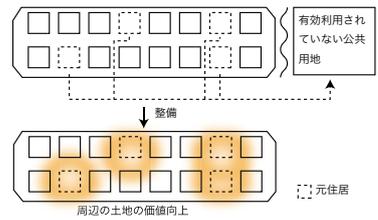


図9 土地費用捻出の模式図

#### 3.3 住居の配置計画

土地を確保した後の住居とまちなわの配置計画を検討した。現在の横浜新町は塀で囲まれている家も多く、家と家との間には必ず柵が設けられている(図10)。これではまちなわ等はつくる事は出来ないで柵等は撤去する。

検討した結果図12の様な配置計画とした。ある程度の駐車スペースを一つにすることで、その分のスペースをまちなわや路地の空間とした。また駐車場に行く際や、隣近所への移動はまちなわや路地を使ってもらふ事を考え、敷地中央部はプライバシーの高いコモンスペースとなるように植栽した。

また家を南北に多少ずらす事によって向こう側が見えないという空間を作るようにした。ずらす事によって出来たスペースはまちなわや路地として利用するほか、敷地外を歩く人々の休憩の場としても利用してもらうように計画した。

#### 3.4 まちなわのデザイン

まちなわはコモンスペースとして扱う。まちなわは食事や休憩、遊びや趣味といった様々な事ができ、それらを一家族内だけで完結してしまう訳ではなく、近隣住民と交流できる場所となるようにする。一緒に食事をする場所、友達と遊ぶ場所、趣味の何かをする場所等まちなわが、まちなわのコミュニケーションを促す場所となるようにする(図11～図15)。

### 4, まとめ

横浜新町におけるまちなわのデザインによって、横浜新町の住宅の間の空間にコミュニケーションを生む場をつくることが出来た。

現在は区画整備された土地に沿って柵が並び、その柵も共有はしていないのでそれぞれの家庭が持っている。路地のようなものは、入る隙がなく、完全にそれぞれの家が孤立している。これらの状態では隣近所の繋がりは発生しにくいと考えられる。



図10 住宅の現況写真

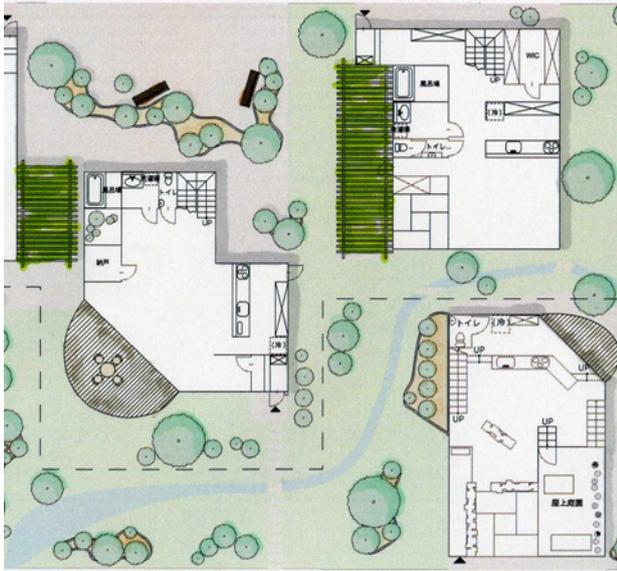


図11 平面図の一部拡大図

ウッドデッキやパーゴラ等を設けそれらを共用する。ウッドデッキでパーティーや食事、パーゴラでは植物観賞や休憩、小さな川では動物観賞等が出来る。敷地内に植えてある木や植物は、外からの視線を受け止め、敷地内のウッドデッキやパーゴラの間にはあまり木を植えないようにし、敷地内でのコミュニケーションはとりやすいようにした。まちにわや路地では洗濯物が干してあったり、サッカーボールが転がっていたり住民の生活がにじみ出していることによって、敷地外の人が入りにくい空間となる。



図13 まちにわのイメージパース



図14 二階のパース

図15 和室からのパース



図12 対象地の平面図と断面図